

「特集：地理教育の現場から」

序

本誌は、お茶の水女子大学地理学教室に係わる人々、それは学部や大学院の在學生や卒業生、教員のみならずなんらかのかたちで本学地理学教室に係わって生成されていく多様な地理学的知に関心を持つ人々のすべてに広く開かれた議論の場、けっして華々しくはないが、途絶えることなく地理学的知の発信を実践していく場として存在し、やがて半世紀を迎えようとしている。来るべき半世紀に向かって本誌の編集体制にもさまざまな刷新が計画されているが、その第一歩として49号からは巻頭に「特集」を設けることになった。

雑誌の「特集」とは、ひとつのテーマについての複数の論考を掲載することだが、本誌の「特集」の意図は読者に多角的な論考を提示して、そこから読者自身の論考を構築してもらい、次いでそれを本誌に投げ返してもらおうとする、いわば論考のキャッチボールにある。お茶の水女子大学の歴史的特性、これまでの学校教育に占めてきた地理教育の位置から、本誌の読者には学校における地理教育に携わる人々、あるいは現場の外部にあっても地理教育に深い関心をもつ人々が多いはずである。したがって、「特集」の最初のテーマは「地理教育の現場から」とし、大学、高校の教育現場からの声を集めた。

特集に含まれる各稿について簡単に紹介すると、まず、滝沢は、日本地理学会地理教育専門委員会による大学生、高校生の地理的知識、学力調査データから地理教育の現状を明らかにし、教員

養成や入試方式にいたる多様な課題、地理教育の重要性を訴える啓蒙・陳情活動のさらなる展開を主張している。菊池、杉谷はそれぞれ高校、大学での地理教育の現状を、とくに生徒・学生の関心の低さとつねに個別科学へと分裂の危機をはらむ地理学の分かりにくさとの関連において報告している。長谷川は、大学での環境教育実践から地理学と環境学の連携を「自然と人文の融合としての総合学の地理学」という視点にあると展望している。さらに本誌では「特集」の外からも声は響いていることに留意していただきたい。「論文」では齊藤が、幕末・明治初期の日本の地理教育黎明期の教科書として、米国女性地理学者コーネルの地理書がきわめて重要な役割を果たしたことを論述し、「書評」では田宮が山口幸男他編『地理教育カリキュラムの創造—小・中・高一貫地理教育カリキュラム』の批評を通して地理教育構築の議論の論点を提示している。

「特集」、「論文」、「書評」と論述のスタイルは異なるが、いずれもがよりよい「地理教育」の思想的営為を語る声であることに変わりはない。本誌がこのような構成方法をとる理由は、本誌が多様な思想的営為の自由な出会いの場、多声的な場でありたいからである。本「特集」への応答が次の「特集」を形成していくこと、つまり読者の皆様からの返球が頂ければこれ以上の幸いはない。

(編集委員長 石塚 道子)